

## パネラー報告 2 —価値論と人間主義的日蓮論—

勘 坂 純 市

牧口がなぜ、いわゆる「人間主義的」な日蓮論を確立したか、私の関心はこの点にあります。いまでこそ、日蓮をヒューマニズムや平和主義の観点から論ずることは珍しくはありません。しかし、牧口が日蓮正宗に入信した1928年（昭和3年）ごろは決してそうではありませんでした。皆さんは「日蓮主義」という言葉をご存知でしょうか。戦前に日蓮のことを語ろうと思えば、国柱会の田中智学や、顕本法華宗の本多日生などが中心となった、「国家主義的」な日蓮論、すなわち「日蓮主義」が最も一般的な思想でした。しかし、牧口はそうした日蓮主義には与しなかった。それはなぜかというのが、問題関心の出発点です。

日蓮主義者たちが主張したことは、まず、天皇を戴く日本の「偉大さ」でした。例えば、本多日生は次のように言います。

「元来日本といふ国は世界中に於きまして一番特性を持った国であります、其特性とは何であるか即ち国体の精華であります、皇統の連綿として続き万世一系の皇室を戴いて居る事であります」<sup>(1)</sup>

また、田中智学は次のように言います。

「日蓮主義は即ち日本主義なり、日蓮上人は日本国の霊的国体を教理的に解釈して、末法万年宇内人類の最終帰依所を与えんが為に出現せり、本化の大成は即ち日本国教にして、日本国教は即ち世界教なり」<sup>(2)</sup>

つまり、日本には、永久の平和を成立するために、「世界を統一する天業」を遂行しなければならず、日蓮はその日本の使命を明らかにしたというのです。こうした使命をもつ日本が行う戦争は、道徳的に正当化されます。後に、日中戦争、太平洋戦争を遂行するスローガンとなった「八紘一宇」（全世界を天皇のもとに一つの家とするという意味）が、智学の造語であることはよく知られています。また、満州国の建国に大きな役割を果たした石原莞爾も智学の思想の大きな影響を受けていました。今の学生にいてもなかなか信じてもらえないのですが、日蓮の思想は、このように日本がアジアへの侵略戦争を進めるうえで大きな役割を果たしたのです。

牧口が入信した当時は、このような「日蓮主義」がいまだ大きな力をもっていました。そういう国家主義的な日蓮論がいわば主流であった時代に、どうして牧口は日蓮の思想を奉じて、戦後の創価学会の思想に繋がる人間主義的な日蓮論を展開することが出来たのか。今日は、その問題を考えてみたいと思います。

## 1. 人間主義的日蓮論の確立

まず、牧口は、「日蓮正宗」に入信したのだから、そこで「日蓮主義」とは異なる日蓮論を得ることができたという、ある意味で非常に素直な推測がありえます。しかし、これは間違いです。日蓮正宗は決して日蓮主義の批判勢力ではなかったのです。

日蓮正宗と日蓮主義者の関係を見てみると、まず1901年に、後に日蓮正宗<sup>(3)</sup>の管長となる阿部日正と日蓮主義の中心となった本多日生とが法論を行なっていることが目に付きます<sup>(4)</sup>。この法論の決着については、どちらも自分が勝ったと言っており、はっきりしないのですが、明らかなことは、この法論の後、日蓮正宗はこの日蓮主義の本多日生を中心とした日蓮主義の動きに無批判について行くようになったということです。そのことは、とくに日蓮宗各派の統合運動にみることができます。

日蓮主義運動の一つとして、日蓮門下の各派を一つに統合しようという動きがありました。田中智学と本多日生を中心に、繰り返し統合の試みが行なわれますが、それに日蓮正宗は、阿部日正を中心に積極的に参加していきます。1回目の波は1914年でした。このとき、阿部日正は、本多日生、そして日蓮宗管長の小泉日慈とともに、日蓮門下教団の統合帰一を求める「照会状」に名を連ねます。そのなかには、「日蓮主義勃興の機は今正に是其の時なり」と「日蓮主義」の流行が統合運動の背景にあることが示されています。この統合運動は、一端、頓挫しますが、運動に残った宗派で1916年に「総合修学林大学部」を設立し、阿部日正はその「学長」に就任しています。統合運動の第2波は、1922年に日蓮大聖人に対して天皇から「立正大師」という名前が与えられるときです。智学が、「朝廷から勅号は下った……。いよいよ日蓮主義本舞台の幕が開いた」と述べた「立正大師」諡号宣下で阿部日正は積極的に関わっていきます<sup>(5)</sup>。こうしたことから明かなように、牧口が入信した1928年の時点では、もう日蓮正宗の中に、少なくともその管長周辺には「日蓮主義」を批判する意識もないし、思想もなかったのです。

牧口の人間主義的な日蓮観は「日蓮正宗」からきたものではない。とすると、2つ目は、牧口を折伏した三谷素啓という人から習ったのかと考えられます。三谷が日蓮主義者とは異なって、明確に「皇国史観」を否定する人物であり、この点が、牧口が日蓮正宗に入信するうえで一定の役割を果たしていることは事実です<sup>(6)</sup>。しかし、牧口の日蓮観を、三谷からそっくり受け継いだものと考えすることは出来ません。

そうすると、結局、牧口が入信の前に確立させていた自身の「価値論」、また「創価教育学」が、日蓮の人間主義的な特質を掴む基盤となっていたのではないかと——それが、今の段階での、私の結論です。一部の人は、牧口は自分の「価値論」を中心にして、そこに日蓮の思想をつなげており、「価値論」が“主”で、日蓮の思想が“従”になっているからだめだ、などと批判しますが、そうではない。逆に、牧口は「価値論」というきちんとした基盤をもっていたからこそ、国家主義的な「日蓮主義」とは異なる人間主義的な日蓮論を展開できたのではないかと、私は考えるのです。この点をもう少し詳しく説明しましょう。

まず、牧口は、教育の目的は、あくまでも一人ひとりの幸福であるという点を貫いています。『創価教育学体系』には、次のようにあります。

「教育の目的たるべき文化生活の円満なる遂行を、如実に言い表す語は幸福以外にはないであろう」<sup>(7)</sup>

幸福とは価値創造。ご存知の通り、牧口にとって価値というのは「美利善」でした。牧口はこの基本理念を生涯貫きます。例えば、宗教者の一部から、宗教の価値、すなわち「聖」は価

値ではないのかという疑問が起こりうることについて、牧口は『創価教育体系』の中で、次のように論じています。

「人を救ひ世を救ふことを除いて宗教の社会的存立の意義があらうか。人を救ふことは利的価値ではないか。世を救ふことは道徳的価値ではないか。…法華經の第十六壽量品に於て説かれたる御主旨は人生の苦惱になやむ衆生をして悉く成仏せしめて永久無死なる生の満足に安住せしめんとの御約束にあらざるか」<sup>(8)</sup>

つまり宗教は、それ自体に価値があるのではなくて、現実困っている人を救い幸せにしていくから価値があるのだというわけです。宗教のために人間があるのではなく、人間のために宗教があると。この視点を、この時点で、牧口はしっかり持っている。

あくまでも、一人ひとりの幸福が目的であるという発想は、国家との関係でも変わりません。国民あつての国家である。教育に関しても、子供を手段視することは許されない。また、天皇を論ずる際も、一人ひとりの幸福が目的であるという姿勢は一貫しています。牧口は、天皇制自体を否定しません<sup>(9)</sup>。なぜ天皇を尊敬・崇拜するのかといえば、それは天皇も国民のために尽くしている、その働きがあるから尊敬するのだというわけです。例えば、『教授の統合中心としての郷土科研究』（1911年）には、次のようにあります。

「大権の発動する其の主体たる天皇陛下は此等の文武百官なる機関を透して活動する、其の理由は決して天皇御自身の為めにするのにあらずして全く国家全体の御頭首となり御主人公となりて、下万民の為に御尽し遊ばされて居るのである」<sup>(10)</sup>

天皇は国家の「頭首」として、「下万民」すなわち民衆のために働いている。だから尊敬するのだというわけです。このように牧口は、国家・天皇の役割を、あくまで一人ひとりの幸福という観点から考えていきます。

国家・天皇を学校で教えていく場合にも、牧口は決して超越的な国家観・天皇観は採りません。頭ごなしに、例えば日蓮主義者のように、「日本は神の国だ」とか「世界を統一する天業」があるのだとは言わない。こんなことをいわれても生徒たちには何の実感も伴わないからです。そうではなく、牧口は、生徒、児童一人ひとりに「直観」（これはインスピレーションという意味ではなく、直接に感じる事が出来るという意味です）を通して国家を教えていくのです。例えば、郷土からの発想。鶴見太郎は、次のように牧口の方法をまとめています。

「まず、学校、家庭における政治を児童に観察させ、まず、『権力』というものを認識させた後、順次その観察対象を広げていき、社会の政治現象、更には国家機構へと分析の眼をすすめる。この手順に従えば国家権力もまた関係概念として捉えられ、自ずからそこでえられる視点は神がかり的な思考と対峙する」。<sup>(11)</sup>

国家を捉える方法においても、牧口は国家主義的な視点とは違う視点を持っていたのです。そうした視点は、国家・天皇を批判するときにも変わりません。

つねに一人ひとりの幸福という視点から出発する牧口にとって、国家・天皇であつても、民衆の幸福を増進するという役割を果たさなくなれば、当然、批判の対象となります。1941年10月に発表された「大善生活法即ち人間の平凡生活」<sup>(12)</sup>で、牧口は、「家長が聡明であり円満で

あれば家族も従つて之に服して自ら平和幸福の暮らしが出来る」と述べた後で、「ともかくも家庭には斯の如くそんなに難しくなく容易に行はれる大善生活が何故に国家社会に行はれず、中小善の生活が行はれて今日の各方面の行詰りが生じるか」と、問いを立てます。「真珠湾攻撃」を2ヶ月後に控えた当時の日本の状況を、牧口は「各方面の行詰り」と批判的に捉えているのです。では、何故そうした「行詰り」が生じたか。牧口は、その原因を「指導階級」の意識に求めます。すなわち、

「その家長の大善生活の意識がなければ世に極めて僅少稀有に過ぎないのに、況んや大なる国家又はその内外の生活に於て、上流に立つ指導者階級に大善生活の意識もなく隅々之を云うものであつても一顧するものもなく、之を教へる経文はあつても、これを実証して理解せしむるものないに於てをや」

「上流に立つ指導者階級」、そこには天皇も含まれると考えられるでしょう。その「指導者階級」に「大善生活」の意識がないことが国民を不幸にしている——牧口は、そうした批判的なまなざしを当時の国家権力に向けていました。民衆を不幸にするのであれば、天皇であっても批判されうる。そして、牧口は、一人ひとりの幸福のために、「大善生活」を、そして日蓮の思想をまっすぐに説き続けるのです。

## 2. 国家権力との対峙

そこで、次に、人間主義的日蓮論をもった牧口が、どのように国家権力と対峙していくかを見ていきましょう。その際に注目すべきは「日蓮主義者」たちとの態度の違いです。とくに、1930年代末から軍部政府は、かつて日本の国家主義、侵略戦争の正統化に大きな役割をはたした「日蓮」の思想をも弾圧の対象としていきます。そのとき、かつて「日蓮主義」に踊った者たちはどのような態度をとったのか。そして、そのなかで牧口はどのように主張を展開したのかを考えてみたいと思います。

第1に注目したいのは、牧口の日蓮門下統合への反対です。1939年に「宗教団体法」が公布されて、これから2年以内のうちに、各宗教は統合せよという指示が出ました。その中で日蓮宗各派のなかで再び統合の動きが活発になりましたが、日蓮正宗はこうした統合には加わりませんでした。それは、牧口が「僧俗護法会議」で強く統合に反対したためです。そのため、日蓮正宗は、小笠原慈聞らの統合を執拗に進めようとした勢力があつたにもかかわらず、最終的には、日蓮門下合同不参加を決めるのです<sup>(13)</sup>。

先にお話しましたように、日蓮宗の統合は、日蓮主義者によって一貫して進められてきました。それは、「立正大師」諡号宣下に端的に示されるように、日蓮の思想を国家主義的に宣伝する思潮の中で進められてきたのです。こうした動きのなかで、日蓮正宗もまったく批判することなく押し流されてきていた。こうした経緯を考えれば、牧口の反対がなければ、日蓮正宗は自然に統合に参加していたでしょう。しかも今回は、戦争遂行のための思想統制の一環として国家権力によって統合がより強力に推進されているのです。しかし牧口は、それに反対しました。牧口は、彼の信ずる日蓮の法を守るために「邪宗」との同座を拒否し、かつ軍部権力の宗教政策に抵抗したのです。

さて、牧口の軍部権力との戦いの第2は、神札の拒否です。これは有名な話しですが、牧口は、1943年6月、日蓮正宗宗門から神札を受けるよう申し渡されたとき、「承服いたしかねます。神札は絶対に受けません」と拒否しました。これも、国家神道を「天皇制ファシズム」の支柱

として戦争を遂行していた軍部権力への批判となっていることは言うまでもありません。また、神札の拒否は国家主義的日蓮観への批判という側面も持っていました。実は、日蓮門下各派すべてが、日蓮正宗のように「神天上の法門」を掲げて神社への参拝を拒否するわけではありません。例えば、田中智学が1925年に結成した「明治会」は、毎月1回の明治神宮参拝を行事化しています。日蓮主義者は、神道をもとに戦争を遂行する国家に積極的に協力し、むしろ神社参拝を国民に勧めているのです<sup>(14)</sup>。こうした運動に対し、神社から下される神札を「謗法」として批判する可能性を日蓮正宗の教義はもっていました。しかし、彼らはその節を曲げたのです。神札を拒否し、国家神道、そしてそれを支えた日蓮主義を根底から批判したのは、牧口ら、創価教育学会だけでした。

しかも、国家権力に屈して自らの思想を放棄したのは、日蓮門下各派の中で、日蓮正宗だけではありませんでした。「曼荼羅国神不敬事件」というのをご存知でしょうか。1938年に、日本神職会会長の徳重三郎が日蓮図頭の曼荼羅に天照大神・八幡大菩薩を載せるは不敬であると神戸地裁に告発します。これを受け、翌年、例えば日蓮正宗内でも、小笠原慈聞が講義講習会で行った「日蓮正宗教義の再吟味」という講演で、御本尊において、天照、八幡の判が日蓮の下にあるのは不敬であると述べます。そして、同年、日蓮宗管長の望月日謙は、身延山に日蓮門下代表100人を招集し、曼荼羅から国神の削除を決議するのです<sup>(15)</sup>。信じられますか。権力の圧力に屈して、彼らは「本尊」である曼荼羅を改ざんしたのです。軍部権力の圧力は、日蓮の遺文にも及びます。1941年に日蓮宗は政府の要請により日蓮門下各派に呼びかけ、「宗祖御遺文削除訂正委員会」を組織して、重要遺文70余篇を選び、そのなかから約200箇所を削除することを決定します<sup>(16)</sup>。こうした決定を受けて日蓮正宗でも、「御書（日蓮遺文）」の発刊を禁止し、「本地垂迹説」に関わる14箇所を削除します。このように日蓮正宗をはじめ、日蓮宗各派が次々と日蓮の法を捨て去るなか、牧口は、その法を守ったのです。

以上述べたように1920年代ごろまで日蓮主義の流行のなかで国家主義的日蓮論を宣伝した者たちは、一度、国家権力が自分たちに牙を向けると、こぞって日蓮の法を捨て去りました。戸頃重基は次のように述べています。

「日蓮思想を従来、国家主義的に捏造し推進してきた国柱会の人びとをはじめ世のいわゆる日蓮主義者のあいだから、遺文が不敬罪に問われたとき、本門法華宗の刈谷日任、株橋諦秀、小笠原日堂、原真平、日蓮正宗信者の牧口常三郎らの受難を例外とすれば官権に抵抗するものあらわれなかった、ということは重視に値する現象だ」<sup>(17)</sup>

田中智学、本多日生らの言説に乗って、国家主義に与していた日蓮宗各派は、国家権力の弾圧を受けると権力に屈していきました。これに対し、一人ひとりの幸福から宗教・国家を捉える人間主義的視点を貫いた牧口は、国家の弾圧に屈せず、日蓮の法を守ったのです。

もちろん、こうした牧口の行動は、単に宗教的な法を守ったことに止まりません。彼は、戦争で苦しむ民衆を見据えて、そうした人びとを救うために日蓮の法を日本が受け入れることを強く主張したのです。神札をうけることを拒否して、日蓮正宗の総本山を下山したとき、牧口は、次のように述べたといえます。

「一宗が減びることではない、一国が減びる事を嘆くのである。宗祖聖人のお悲しみを、恐れるのである。いまこそ、国家諫曉の時ではないか」<sup>(18)</sup>

「一国が減びる」なかでの人びとの苦悩から、牧口はやはり出発しています。「価値論」で、「人を救ひ世を救ふことを除いて宗教の社会的存立の意義があらうか」と述べた牧口にとって、民衆の苦悩をよそに、自らの保身のみを考え「一宗が減びること」だけを避けようとする宗教には、もはや「社会的存立の意義」はなかったのではないのでしょうか。

そして、この神札拒否が直接の原因となり、1943年7月6日、牧口は伊豆・須崎にて治安維持法違反、不敬罪の容疑で逮捕されます。牧口の最後の闘いは、獄中で展開されるのです。牧口の「訊問調書」については、先ほど伊藤貴雄さんから非常に明快な分析もありました。そこで、ここでは、牧口が、日蓮の「立正安国論」から「三災」について述べられた箇所を引用して展開した戦争批判を考察してみたいと思います。「立正安国論」には次のようにあります。

「若し国王有つて無量世に於て施、戒、慧、を修すとも我が法の滅せんを見て捨てゝ擁護せずんば是の如く種ゆる所の無量の善根悉く皆滅失して其国に当に三つの不祥の事有るべし、一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり」<sup>(19)</sup>

すなわち「立正安国論」では、穀貴（飢饉）と、疫病とならんで、兵革すなわち戦争が三災の一つにあげられています。つまり、戦争は民衆が苦しむ「災」であり、それゆえ悪なのです。人びとの幸福こそが目的であるという姿勢を貫いた牧口が、こうした立正安国論の思想に大きく共感したことは当然であったといえるでしょう。それは、当時の戦争を「八紘一宇」「大東亜共栄圏」を実現するための「聖戦」と宣伝した軍部権力とは明らかに異なる戦争観でした。ではなぜ日本はこうした戦争という災いに苦しんでいるのか。牧口は、先の引用に続けて次のように述べます。

「現在の日支事変や大東亜戦争等にしても其の原因は矢張り謗法国である処から起きて居ると思ひます」<sup>(20)</sup>

つまり、天皇をはじめとした政治が悪い「謗法国」であるからだというわけです。先に述べたように、牧口は、国家や天皇は超越的存在ではなく、あくまで民衆の幸福＝価値創造に役に立つから尊敬の対象になると考えていました。そうした視点から、牧口が、「上流に立つ指導者階級」が「大善生活」をする意識がないために、「各方面の行詰まり」が生じていると論じたことも紹介しました。この姿勢は、獄中でも全く変わっていません。むしろ、より直接に軍部権力を批判しています。

こうした牧口の議論は、取調官の「法華經の真理から見れば日本国も濁悪末法の社会なりや」という問に対する答えのなかで展開しています。当時、多くの人は、日本は万世一系の皇室を戴く特別の国だと考えていた——その日本が「濁悪末法の社会」なのか、と問われたのです。この問に対し、牧口は「七百年前に日蓮聖人が……日本は法華弘通の中心でありながら謗法国の最たるものとして国家国民を折伏教化に努められた」と答えるのです。日本は、最悪の「謗法国」だと。この牧口の日蓮論は、これまで繰り返してきたように、日蓮主義者たちの国家主義的日蓮論とは正反対の立場に立っています。冒頭に紹介したように、田中智学は、「日蓮上人は日本国の霊的国体を教理的に解釈して、末法万年宇内人類の最終帰依所を与えんが為に出現せり」と述べていました。日本を「霊的国体」をもつ“最高”の特別の国と述べ、その国家主義を先導し、その侵略戦争を賛美したのです。しかし、日蓮主義者たちは、国家主義が猛威を

ふるうなかで逆に日蓮の思想を捨て去りました。それに対し、自身の価値論をもとに、日蓮の行動を「災」に苦しむ一人ひとりの民衆を救う実践と捉えた牧口は、日本を「謗法国」と言い切りました。彼は、国家権力の弾圧に最後まで屈することなく、日蓮の法を守りぬき、1944年11月18日に獄死したのです。

牧口は一人ひとりの「幸福」を目的とし、個人の「直観」から発想する創価教育・価値論に基づくことによって、人間主義的に日蓮を捉えました。そして、その信仰を命を賭けで貫くことによって、国家=国体を第一義とし、個人を手段化する国家主義、日蓮主義を根底的に批判したのです。

(注)

- (1) 本多日生「日本国と法華経」1905年（大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館、2001年、135ページに引用）
- (2) 田中智学『世界統一の天業』1904年（大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』123ページに引用）
- (3) 1912年までは「日蓮宗富士派」を名乗っていたが、混乱を避けるため、本稿では「日蓮正宗」の称号で統一する。
- (4) 『富士宗学要集』第7巻（富士宗学要集刊行会、1956年）307-82ページ
- (5) 大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』207-216、289-97ページ
- (6) 宮田幸一『牧口常三郎の宗教運動』（第三文明社、1993年）、74-9ページ
- (7) 『創価教育学体系』第1巻、1930年（『牧口常三郎全集』〔以下『全集』と略記〕5巻、第三文明社、124ページ）
- (8) 『創価教育学体系』第2巻、1931年（『全集』5巻、356-7ページ）また、宮田幸一による『全集』8巻、101ページの補注も参照。
- (9) 牧口の「天皇（制）」論については、宮田幸一による『全集』8巻、82-5ページの補注を参照。
- (10) 『全集』3巻、325-7ページ
- (11) 鶴見太郎『ある邂逅』（潮出版社、2002年）、103-4頁
- (12) 『全集』10巻、14-8ページ
- (13) 「宗教団体法」公布後の、日蓮宗各派の動きは以下の通り。
 

1939年4月8日	宗教団体法公布
1941年3月2日	日蓮宗・本門宗・顕本法華宗の三派合同し「日蓮宗」となる 法華宗・本門法華宗・本妙法華宗の三派合同し「法華宗」となる
3月10日	日蓮正宗・僧俗護法会議（大石寺）牧口・日蓮宗統合に反対す
3月16日	日蓮正宗・小笠原慈聞が『世界の日蓮』で日蓮門下合同を提唱
3月28日	日蓮正宗・第25回宗会で日蓮門下合同不参加を決定
- (14) 大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』354ページ
- (15) 『法華宗年表』法華宗宗務院、1972年、226-7ページ
- (16) 『法華宗年表』230ページ
- (17) 戸頃重基「日蓮の国家観」（『近代日本と日蓮主義』春秋社、1972年 所収）、22ページ
- (18) 戸田城聖「創価学会の歴史と確信」1951年
- (19) 『全集』第10巻、201ページに引用
- (20) 『全集』第10巻、201-2ページ